

目的 明治政府の欧化政策の一貫として服飾面にも洋装化が奨励された。明治16年には鹿鳴館を竣工させ、それまでの欧風慣習のメイン・イベントとして舞踏会という社交儀礼をも上流階級が採用する事になり、それは欧風化導入面での一つのピリオドをうった。そして、当時、現実に着用された鍋島報効会管蔵のバウンスル・スタイルのドレスをとりあげて調査・研究をおこなった。

方法 その実物資料、着装写真によって調査を進め、復元を通して構成、素材、縫製面での理解を深め、それらの着装における機能を観察しながらシルエットの再現を試みた。

結果 これまでバウンスル・スタイルのドレスのシルエットは服装史の図版や構成図から想像していたが、今回復元を通して構成面並びに補助素材の扱いにいたるまで知ることができた。